

九州派の朽ちる時、世界も又朽ちるだろう

小幡英質

1

私らは永遠の末期の中にいる。いや私らこそが末明の本体でありながら蒼弓の天に幻惑されているところの樹木の如きものでないと果して言い切れるか。いま掌の中に在るのが愛である筈なのに、それをパンとして呑みおろしたあと私らは食糧についての未来を語ったりする。

いま私らの末明の中をあらあらしくかけ抜けていくものがある。それは、おびたしい死霊の移動の兆である筈なのに、私らはそれを己れの血のざわめきの故にしたりする。

私らは多くの場合そのようなさまさまの誤謬の果てに、石を投げたり、種を蒔き続けてきたのかも知れぬ。

一日百二十七回ビルの扉を押しひらいている時の手と絵筆を握っている時の手の、その手の拒絶のサマをしかと見定めている絵描きはすくない。

2

われわれはどこから来るのか われわれは何者なのか われわれは何処へゆくのか
ゴーガン(一九五九)

古風かもしれませんが、ゴーガンの実に長ったらしい題名のついた絵がありますが、私は現代絵画 (!?) や九州派のことを考えるときよくこの題名のことを思い浮かべます。

人達が、夜明けが来そうで遂に来ない未明の中に死んでいくことを、あの絵はきわめて印象的に僕に語りかけてくるわけですが、九州派のすぐれたオルガナイザーである桜井孝身の生きザマと絵ヅラの中にゴーガンの正統な血の流れを見ることができます。彼が、現代の中で遠のいたかに見えるゴーガンの血をよみがえらせ、あせり気味のゴッホの星をいかに美しくまたたかせるかに賭けた情熱に僕はたじろぐ。彼は私らのおこなうさまさまの誤謬を逆説的に真正の武器に持ち変える天才ですので遂に十三年のあいだ九州派を支えてきたのでありましょう。最低の貧者を自任しながら、おごれる貧者へ一灯を贈りつづける桜井のその世界の美術へ賭ける悲願は、今後どのように展いていくのか私にも予想がつきません。

3

われわれは、女のつやめける胎内から来た。われわれは戦う者である。われわれは死地を決定しそこへ赴く…。といったふうにとさわやかに風を巻く優れた女流、田野光子のタンカと腕の冴えは少年の様な純性と水の始き透明さの一段と昇華しつづける大黒愛子のリリズムと、その息の合い具合において、まずは絶品と申せましょう。

ゲリラの戦闘性を決定するカギは、女ゲリラの質の如何に関することは誰かが言っておりましたが、我らのこの二輪の花のうちは九州派の値うちを決定します。

4

右の腕が邪悪の相帯びれば左の手にて、それを斬りかねない彫刻師として宮崎準之助がいます。思想と情念と手のもたらす軌跡が思考の円周上を彼ほど注意深く動いていく作家は日本では荒川修作をおいてほかに見当りません。その作品を見る者にたまらないほどの無理無体の行為を強いて来る。“満ちていてカラッポ”の相貌は末明の中の私らの実像をそこに提示しているからにほかなりません。コレクターが食指を動かすはじめてのもむべなるかな。

「此処に自己が実存している以上は進むことしかない。その為には深く根本的強い心を必要とする。がしかしその心に尚一つの高い心が加わらねばならない。現実から高め出し一つの理想世界を作り、それに均衡と実存性と威厳を与えるためにである」と説く大山右一は己れにとって絵画こそが道徳律であり、あるいはそれを超える神性として豪もゆずりはいたしません。ガンコ者のいるグループとは、その崩壊感覚の故に存在を余儀なくされるという意味に於いて、彼こそは九州派を見捨てるわけにはいきません。

一本の青い線をひくこと一平方米の布を赤く塗ること即俺の人生と決め四十才にして職を投げ捨てた石橋泰幸の人もなげなる明快な絵づくりの秘密は何でしょうか。水もしたたるエロチズムの開花が楽しみです。

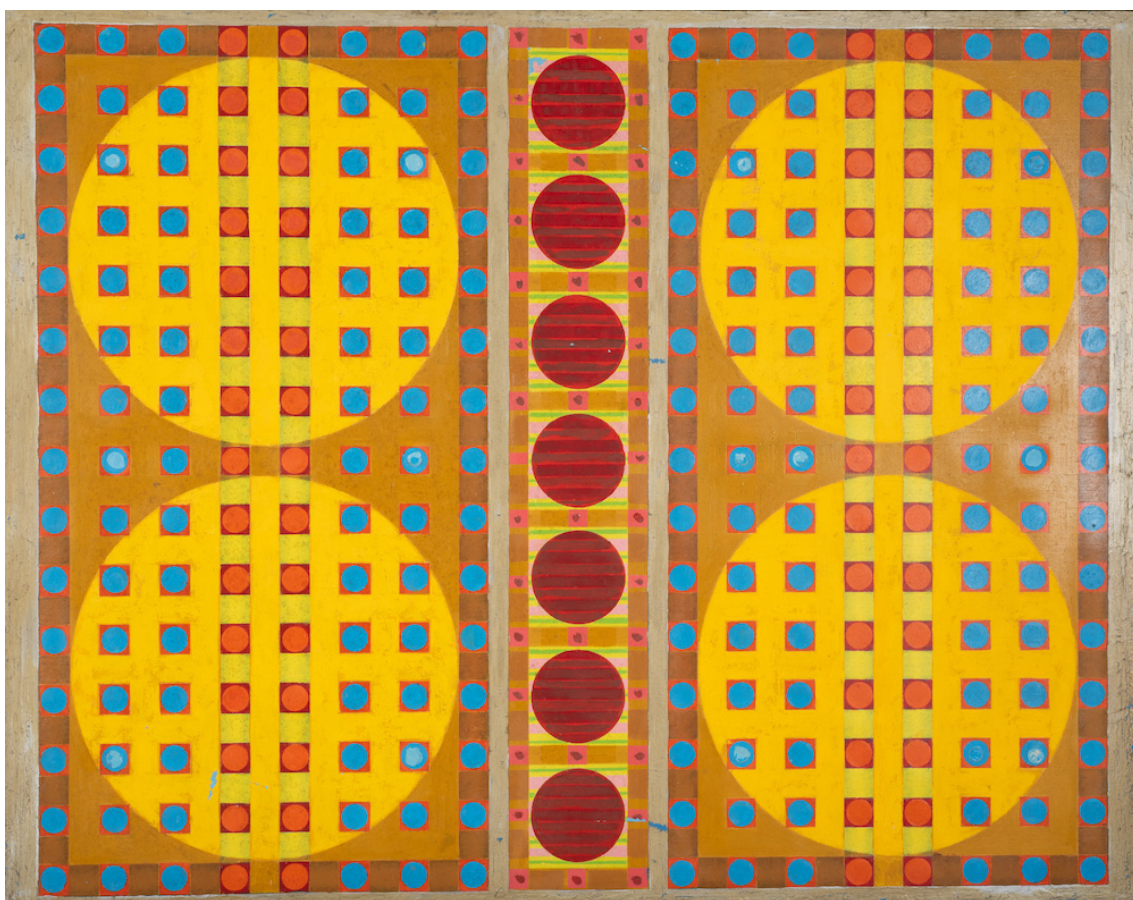
あとひとり、国家の死滅を論ずるほどには美について論じたがらぬ私があります。リンゴを売るように絵が売れないものかとおねづねリンゴの木を見ている私は、いつの間にか、ろくでもない九州派のマネジャー（将来心ず儲けるであろうという輝やかな幻影を追って）役を今年から押しつけられています。

例会通知の中の文の一部を写し、この長々とした駄文を打ち切ります。

“どこかの田舎の大山持ちの娘さんでもたぶらかして金持ちになれば、グループ専用の美術館とスタジオをつくり、グループの皆さんの生活を保障し描きたいざんまいの日々をお贈りしたい想いのみにとらわれております。これはサクライ氏の天かける論よりはるかに実現の相を帯びておるプランのようでありますからなかなか捨てきれません。宮崎君に言わせればスーツケース二個を各自がぶらさげ、汽車に乗り込む大道芸人的運動（商売）論、これも又捨てがたい。田舎町でもうけた勇み足で飛行機に乗り込む。翌日ハワイの蒼い海辺で又ひともうけとはいかないものか。皆さんのチエをお借りしたい!!!

さて終りに、ここまで書き終えた時、ゴーガンにしてはめずらしくかん高いカンラカラカラといったふうな笑い声がタヒチの海底あたりからきこえたように思ったのは、私のきおいすぎの故でしょうか。

我ら九州派の「セックス博物展」そのIIの催しには諸兄弟のお越しを心からお待ちいたしております。



unknown-小幡-F50